

ベトナムの地生態環境：開発との接点

古市剛久（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

ベトナムの概要を理解する一環として、開発に関わる題材を念頭に置きながら、同国の地生態環境を概説した。

地生態環境を形成する基本要素である地形、地質、気候を国のスケールで概観すると、地形（地勢）は 5 区分され（The highlands, Red river delta, The coastal lowlands, Central highlands, and Mekong river delta）、その中でも 2 つの大河川のデルタ（紅河デルタ、メコン河デルタ）に農業生産と人口が集中している。地質的には安定陸塊上（ユーラシア・プレート）に立地し、北部ではプレート内構造として北西－南東走行の線構造（紅河谷）の卓越と同構造を形成する断層帯が存在する。ケッペンの気候区分では、中部・南部（The coastal lowlands, Central highlands, and Mekong river delta）が熱帯に区分されるのに対し、北部（The highlands and Red river delta）は温帯に区分される。雨季の降雨では台風の影響が無視できないものの、それが主要な降雨メカニズムではない。

また、開発との関わりが深い地生態環境として、泥炭湿地（酸性硫酸塩土壌）、マングローブ林（海岸湿地環境）、土壌浸食・土砂堆積（土地・水資源管理）、洪水（災害への対応）、及び森林資源を取り上げ、それぞれについてベトナムにおける状況を例示した。開発（農地化）のための泥炭湿地からの排水は、泥炭地荒廃（酸性硫酸塩土壌）や泥炭火災（大量の炭素放出）を生む主要な要因となっており、その対処としては、地下水位の回復、あるいは酸化土壌への適応樹種の選定・植栽が挙げられる。ラムサール条約はマングローブ林・湿地環境の保全戦略の一つとしても捉えられるが、衛星データによる例証研究ではその戦略の限界も指摘されている。土壌浸食が引き起こす最悪の状況は「非可逆的な荒地化」であり、また下流部での集中的な土砂堆積でも顕著な問題が引き起こされている。紅河デルタ、メコン河デルタは洪水の繰り返しにより形成されてきた地形であり、従って洪水の常襲地域である。近年でも紅河デルタにおいて 2008 年 11 月に、メコン河デルタでは 2000 年に洪水があった。一方、1990 年－2000 年の森林資源変化を見ると、ベトナムは東南アジア諸国で唯一その面積が増加しており、同国でのこれまでの熱心な取り組みが伺える。

最後に土壌浸食を例として、ある事象の一般的な説明（常識）が妥当なものかどうかを検証し、研究を行う上で常識を疑うことの大切さを指摘した。

（記録：古市剛久）